Toru HIRAKAWA: Medical Studies on Rural Welfare at
Toshima Island

Part II. On the Composition of Population and the
Statistics of the Movement of population

椿栽培一島嶼(東京都下利島)の 農村厚生医学的研究

第Ⅱ報 人口構成及び人口動態

東京医科歯科大学医学部農村厚生医学研究施設(主任 柳沢文徳教授)

平 川 達

緒 言

所謂一島一村である東京都利島村の調査地概要は、第Ⅰ報としてさきに報告した。既述の如く本村は伊豆七島でも屈指の豊かな椿樹林に囲繞され、椿油の生産上に特異な位置を占めているが、その生産額も村民の生計の維持には充分と云えぬ。島勢嶮阻のため農耕地は少く、且つ港が整備されておらぬ関係より漁業も亦殆んど行われなく、食糧の自給自足がようやく可能であるという程度の特異農村であるので、その人口静態及び動態には他の一般農村或は近隣諸島とも自ら異なるところがあるものと推考されるゆえんである。殊に交通に関しては第Ⅰ報に報告した如く不便の為島外の諸島は勿論のこと、他村への移動は少ないことが考へうるので、人口の移動は極度に制限される結果となる。特に産業が全く椿栽培という特殊な産業形態をとつている関係上、経済上においても村は極めて貧弱であつて、勿論個人に於いても同様である。その上に食糧も人口約300~400人をまかなうのに不足勝であるということから必然的に村内居住者は一定となり、自然人口増は就業の為に他地域に出掛ける結果をまねいており、その為にも特殊な人口構成となることが考えられる。

なお、本報に用いた資料は、同村役場所管のもの为基础とし、一部の不備な点は関係官庁及び村内に於ける聞き込み調査によつて補充訂正したものである。

調査成績

1. 人口静態

1) 人口構成

人口静態の調査には、さきに当研究施設の岩井¹⁾が述べているように、現在人口、常住人口の何れを基礎人口にえらぶかを先づ考慮する必要がある。本村に於いては、戦前、戦後を通じて諸資料は殆んど現在人口に基づいており、之と常住人口との差は少いので、著者は便宜上、之等現在人口に拠り検討を加へることとした。

昭和31年3月31日現在、利島村に生活の本拠を有し世帯を構成している人員は、男子174名、女子186名、計360名であつた。その性別、年齢別人口構成及びその各々の千分比、男女比は第1表の如くである。又年齢階級別、性別に百分比を以て表わした人口年齢構成を第1図に示す。又参考のため東京都の人口構成を対照として掲げた。男女比は女子100に対して男93.5で、男女の平均年齢は男

年令	男	女	男	女
0	2,175	4,215	6,167	520
1	2,287	4,107	6,167	200
2	2,303	3,161	7,194	133
3	7,402	3,161	10,278	233
4	3,172	7,376	10,278	429
5	4,230	5,269	9,260	800
6	5,289	10,337	5,477	500
7	7,037	7,376	8,222	143
8	7,402	9,484	16,444	773
9	5,289	5,269	10,278	1000
10	5,289	5,269	10,278	1000
11	5,289	2,108	7,194	233
12	4,402	2,115	3,067	500
13	3,172	2,108	5,139	1500
14	6,343	6,372	12,333	1000
15	3,172	1,554	4,111	3000
16	0	1,554	1,028	
17	2,115	3,161	5,139	667
18	0	2,108	2,056	
19	2,115	6,323	8,222	333
20	2,115	7,037	9,033	200
21	7,037	3,161	4,111	333
22	5,289	1,554	6,167	5000
23	7,037	2,115	5,139	250
24	1,037	2,033	3,033	500
25	3,172	3,151	6,167	1000
26	4,230	3,161	7,194	133
27	3,172	2,115	7,194	1500
28	2,115	3,161	5,139	667
29	7,037	3,161	4,111	333
30	1,037	5,269	6,167	200
31	4,230	3,161	7,194	133
32	2,115	1,554	3,033	2000
33	7,037	1,554	2,056	1000
34	3,172	2,108	5,139	1000
35	2,115	3,161	5,139	667
36	7,037	3,161	4,111	333
37	3,172	1,554	4,111	3000
38	0	0	0	
39	6,343	3,161	9,250	200
40	7,037	1,554	2,056	1000
41	3,172	0	3,033	
42	3,172	2,108	5,139	1000
43	3,172	3,161	6,167	1000
44	7,037	1,554	2,056	1000
45	2,115	2,108	4,111	1000
46	0	1,554	1,028	
47	7,037	3,161	4,111	333
48	1,037	2,108	3,033	500
49	7,037	1,554	2,056	1000
50	1,037	0	1,028	
51	0	2,108	2,056	
52	1,037	0	1,028	
53	1,037	0	1,028	
54	2,115	2,108	4,111	1200
55	7,037	0	1,028	
56	3,172	3,161	6,167	400
57	5,289	0	5,139	
58	1,037	3,161	4,111	333
59	7,037	3,161	4,111	333
60	3,172	1,554	4,111	3000
61	2,115	1,554	3,033	200
62	7,037	1,554	2,056	1000
63	3,172	0	3,033	
64	7,037	1,554	2,056	1000
65	2,115	0	2,056	
66	0	2,108	2,056	
67	2,115	0	2,056	
68	0	0	0	
69	0	2,108	2,056	
70	1,037	2,108	3,033	500
71	1,037	0	1,028	
72	0	2,108	2,056	
73	2,115	1,554	3,033	2000
74	7,037	3,161	4,111	333
75	0	0	0	
76	0	1,554	1,028	
77	0	2,108	2,056	
78	0	7,037	1,028	
79	1,037	0	1,028	
80	0	0	0	
81	0	1,554	1,028	
82	0	0	0	
83	0	0	0	
84	0	0	0	
85	0	0	0	
86	0	0	0	
87	1,037	0	1,028	
174	786	360	1935	

28.4, 女 27.5 であつた。年令別に観察して最も構成人員の多いのは 8 才の 4.4%, 次が 6 才の 4.2% で、即ち年令階級では 5~9 才の層が最も多かつた。男子では 10~14 才, 女子では 5~9 才が最も多かつた。之に反して 0~4 才, 15~19 及び 20~24 才の層は男女共に目立つた陥凹を見せているのが注目される。また男子の 45~54 才, 女子の 40~44 才, 50~54 才, 60~69 才等は何れもその前後の階層に比べて少なかつた。現存者の最高年令は男子の 87 才, 女子 81 才で、老令化指数は 7.8 であつた。なお、本村は内地と隔絶された孤島という特殊条件下の農村であるので、この人口構成の比較に当つても一般農村を対照とするのは妥当でないと考えられる。即ち、同様の島嶼, 就中、同じ伊豆諸島に属する村落との比較がなされなければならない。さきに宮本(正)等²⁾は神津島の諸調査を

行い人口構成にも言及しているが、著者は更に同様に一島一村で且つ比較的に人口、面積ともない御蔵島及び式根島(但し新島の属島)との比較を試みた。第 2 図に之を示す。御蔵島は男女共に 15~24 才の層が著明に減少しており、この他男子では 0~4 才, 30~34 才, 45~49 才が何れも少く、55~59 才も僅かに少ない。女子では 5~9 才及び 25~29 才の層も少く、40~44 才の層もその前後に比して陥凹を示している。又、男子の 75~79 才, 女子の 65~69 才及び 75~79 才は何れも構成成分の多いのが目につく。式根島でも 0~4 才, 15~24 才は男女共に少なく、又、男女共に 40~44 才がやゝない。式根島に於ける変化は利島及び御蔵島の如く顕著ではなく、むしろ東京都及び神津島に似た形態をとつている。之を要するに、以上三島に共通して認められた変化は、男女共 0~4 才及び 15~24 才の階層の著明な減員と、女子の 40~45 才の階層に於ける軽度の陥凹であつた。

2) 人口の異動(転出入)

村民の移動については別報にあらためて報告する予定である。こゝでは昭和 26 年より昭和 30 年に亘る間の住民登録による転出入の状況を第 2~第 5 表に示した。但し、移動人口が少ないので最近 5 年間の集計で表わした。これによると転出者は転入者を凌駕し、異動人口の内訳は男が多く 54.5% であるに対し、女子は 45.5% であつて、これをそれぞれの総人口に対する移動率として比較しても、男の移動率が高く 41.9% で女は 34.9% である。人口が少ないのでかなり高率となつて示された。転出入の移動先である地域別に考案したのが第 2 表である。転出先は大島が 47.7%, ついで東京が転出に於けるとほぼ同様の比率で多数を占めている。即ち、移動先は大島と東京に集中しており静岡県がこれにつぎ、その他の地域特に大島以外の伊豆諸島への移動は意外に少ないのが注目された。月別の転出入の状況は第 3 図に示した如くであつた。転出は

第1図 利島及び東京都の人口構成（利島 昭和31年3月現在）
（東京都 昭和32年1月現在）

第2図 式根島及び御蔵島の人口構成（昭和31年3月現在）

第2表 昭和26～30年の地域別
転出入の状況（百分率）

転出入別	地域別 性別	東京都内	大 島	式 根 島	神 津 島	静 岡 県	其 の 他	総 数 (人)
転 入	男	21.4	57.1	0	3.6	14.3	3.6	28
	女	41.4	38.0	6.9	0	10.3	3.4	29
	計	31.6	47.4	3.5	1.8	12.3	3.5	57
転 出	男	28.0	48.0	0	0	18.0	6.0	50
	女	38.9	47.2	0	2.8	11.1	0	36
	計	32.6	47.7	0	1.2	15.1	3.5	86
増 減 (人)	男	-8	-8	0	+1	-5	-2	-22
	女	-2	-6	+2	-1	-1	+1	-7
	計	-10	-14	+2	±0	-6	-1	-29

第3図 昭和26～30年の月別転出入の状況

第3表 昭和26～30年の年令階級別
転出入実数

転 出		年 令 階 級	転 入	
男	女		男	女
1	3	0～9	1	4
33	21	10～19	16	18
(27)	(19)	(15～19)	(14)	(17)
6	9	20～29	1	5
4	2	30～39	4	1
4	1	40～49	2	1
2		50～59	2	
		60～69	1	
		70～79	1	
50	36	計	28	29

第4表 昭和26～30年の年度別・
性別転出入の状況（実数）

異 動 別	年 度 別 性 別	26	27	28	29	30	計
転	男	6	7	3	7	5	28
	女	2	3	10	4	10	29
入	計	8	10	13	11	15	57
転	男	14	12	10	9	5	50
	女	5	7	10	6	8	36
出	計	19	19	20	15	13	86
増	男	-8	-5	-7	-2	±0	-22
	女	-3	-4	±0	-2	+2	-7
減	計	-11	-9	-7	-4	+2	-29

第5表 昭和26～30年の理由別転出入の状況

		転 出					転 入				
		職業関係	縁事関係	学業関係	その他	総 数	職業関係	縁事関係	学業関係	その他	総 数
男子	総 数	14	1	13	22	50	3	0	4	16	23
	年平均	2.8	0.2	2.6	4.4	10.0	0.6	0	0.8	3.2	4.6
女子	総 数	16	0	5	15	36	1	2	1	22	26
	年平均	3.2	0	1.0	3.0	7.2	0.2	0.4	0.2	4.4	5.2

4, 6, 8, 9月に多く、転入は4, 7, 8の各月に多かつた。年度別では特に変化は認められなかつたが、年令階級別では、移動は男女共に15～19才の層に最も多く、20～24才が之についている。次に移動の事由を職業関係、縁事関係、学業関係及びその他（世帯の移動、病氣療養、経済的或は社会的理由等）の項に分ち、このうち二つ以上の理由によるものはその主な理由をとつて検討してみた成績を第5表として示した。即ち転出入共に「その他」によるものが多く、第2位は職業関係によるものであつた。なお、この表によれば縁事関係によつて転出したものは1例に過ぎないことが示されているが、実際には職業或はその他等の理由で離島し、その後になつて婚姻等の縁事関係の行われたものは含まれないことに注意

する必要がある。然らずんばこれを以て島外婚は殆んどないかの如き錯覚を起すであらう。

3) 人口の推移

往時の記録としては、宝暦3年(1753)の七島戸口調査の際に戸数98, 人口373人(男142, 女231)で明治5年には54戸235人(男116, 女119), 明治7年54戸234人(男113, 女121)であつたことが判明しているのみで、その後終戦前迄の資料に乏しく長期の連続的観察はなしえなかつたが、世帯数は昭和21年から人口は昭和19年以後第6表の如き逐年推移を示している。即ち大正9年から昭和15年迄は殆んど世帯数及び人口に変動を認めないが、戦後の昭和22年の人口を頂点として、昭和23年以降の人口には僅かつつ緩い減少の傾向が認められ、この他明治5年から大正9年の間

第6表 世帯数・人口・性比の推移

調査年月	世帯数	総人口	男子	女子	男女×100
明治5年2月	54	235	116	119	97.5
大正9年10月 (国勢調査)	72	305	152	153	99.4
14年10月 (国勢調査)	73	321	159	162	98.2
昭和5年10月 (国勢調査)	71	325	157	168	93.5
10年10月 (国勢調査)	72	321	149	172	86.6
15年10月 (国勢調査)	70	321	152	169	89.9
19年2月 (人口調査)		300	142	158	89.9
20年11月 (人口調査)		319	152	167	91.0
21年4月 (人口調査)	71	321	161	160	100.6
22年10月 (国勢調査)	77	409	192	217	88.5
23年8月 (人口調査)	80	375	193	182	106.0
24年4月	82	374	185	189	97.9
25年10月 (国勢調査)	82	386	192	194	99.0
26年1月	83	384	190	194	97.9
27年1月	84	380	184	196	93.9
28年1月	88	371	181	190	95.3
29年1月	82	359	176	183	91.2
30年1月	84	366	177	189	96.2
31年3月	83	360	174	186	93.5

の人口増加と終戦前後の人口変動が注目される。更に年令階級別に戦後9年間の人口の推移を検討すると0～4才の層では、昭和24年以後約3年間増加したが、漸次再び下る傾向が見られ、特に女子に於いてこの傾向は顕著であつた。5～9才では、昭和27年以降増加し、性別では男子はむしろ減少の傾向があるが、女子が対称的に急激に増えて上昇線を維持している。また15～19才及び20～24才は漸減の傾向を示し、特に15～19才では男子の減員の影響が大きいことが窺われた。25～29才は近年女子の増加が認められる。その他壮年層以上では50～54才の減少傾向と55～59才の緩い増加の傾向を挙げることが出来る。その

他の年令では特に著明な動きは認めない。

4) 世帯数及び世帯構成平均人員

世帯数は明治初期から大正8年まで不明であるが、昭和31年3月83世帯で戦後10年間の平均81.4に比しても変動は少いことが知られる。又、戦後の世帯数の増加は戦災、引揚世帯及び新戸籍法による世帯の分離等による理由からである。世帯構成人員の平均数は、昭和31年3月の調査時4.3人で、世帯数不明の昭和19、20両年を除き4.2～4.7人の間にあつてこの変動も極めて僅かであつた。

2. 人口動態

(出生、死亡、乳児死亡、死産、婚姻、離婚)

出生、死亡、乳児死亡、死産、婚姻、離婚の実態は昭和23年より31年の9ヶ年間についてのものを第7表として示した。出生率は人口対1,000、死亡率は人口対100,000、乳児死亡及び死産率は出生1,000に対し、また婚姻率及び離婚率は人口1,000に対する値を以て示した。出生は昭和27年から低下し、最近9年間の平均出生率は25.9であつて、今次大戦後より漸次減少の傾向が認められたが、昭和31年度は出生率30.6で大戦直後と同様であつたが、この原因は不明である。死産は9年間に3を数えるのみで、死産率は34.5であり、乳児死亡も2名のみで死亡率23.0。婚姻率は8.9、離婚率0.5となつている。之等の比率は何れも数が少いために9年間の集計の平均をとつたものである。死亡は9年間の平均10.4でこのうち死因となつた疾病には特殊のものはなく、伝染病による死亡も皆無であつた。死亡数の年度別では昭和28年の8名が最高であつて、他の年度は5～4名にして昭和24年度が2名、昭和31年が1名であつた。9年間の平均1年間の死亡数は3.9名であつた。月別の死亡状況は各年度別にみるにはあまりにも例数が少く、その傾向をうかがうことが出来ぬので、9年間の月別百分率を以て考察すると、1月8.6%、2月20.0%、3月4月共8.6%、5月0%、6月8.6%、7月8月共5.7%、9月8.6%、10

第7表 昭和23～31年間の人口動態

	出 生		死 亡		自然増加		乳 児 死 亡		死 産		婚 姻		離 婚	
	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率	実数	率
昭和23年	14	36.6	3	7.9	+11	28.8	0	0	0	0	9	23.6	0	0
24	14	37.4	4	10.7	+10	26.7	0	0	0	0	3	8.0	1	2.7
25	11	28.1	5	12.8	+6	15.3	0	0	0	0	4	10.2	0	0
26	13	34.0	4	10.5	+9	23.6	1	76.9	0	0	1	2.6	1	2.6
27	8	21.0	2	5.2	+6	15.7	0	0	1	12.5	2	5.2	0	0
28	6	16.4	8	21.9	-2	-5.5	1	16.7	2	33.3	1	2.7	0	0
29	6	16.7	4	11.3	+2	5.6	0	0	0	0	2	5.6	0	0
30	4	10.9	4	10.9	±0	0	0	0	0	0	3	8.2	0	0
31	11	30.6	1	2.8	+10	27.8	0	0	0	0	4	11.1	0	0

第8表 昭和23～昭和31年年令別・性別死亡者数

年 度	昭和23	昭和24	昭和25	昭和26	昭和27	昭和28	昭和29	昭和30	昭和31	総 数	総死亡に 対する 百分率
性別 合 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	男 女 計	
(0～1)				(1) (1)		(1) (1)				(1) (1) (2)	(5.7)
0～9				1 1		1 1				1 1 2	5.7
10～19											
20～29	1 1									1 1	2.9
30～39						1 1				1 1	2.9
40～49								1 1		1 1	2.9
50～59			1 1			1 1				2 2	5.7
60～69		1 1	1 1	1 1	1 2		2 2			3 3 6	17.2
70～79	1 1 2	2 1 3	1 2 3			1 1 2 2 4	1 1 1	1 1	1 1	1 1 8 8 16	45.7
80～				1 1	1 1	1 1 1	1 1	2 2		1 5 6	17.1
計	2 1 3 3	1 4	2 3 5	1 3 4	2 2	3 5 8	2 2 4	1 3 4	1 1	14 21 35	100.0

第9表 昭和23年～31年間の総死亡者35名の国際分類による死因別実数

死 因	実 数										総 数	総死亡に 対 百 分 率	死亡率 (対人口 10万)
	23年	24	25	26	27	28	29	30	31				
総 数	3	4	5	4	2	8	4	4	1	35	100.0	1042.3	
Ⅱ 新 生 物				1	1	1	1			4	11.4	119.1	
Ⅵ 神経及び感覚器の疾患						2				2	5.7	59.6	
Ⅶ 循環器系の疾患						1	1	1		3	8.6	89.3	
Ⅷ 呼吸器系の疾患	3		2	2		1				8	22.9	238.2	
Ⅸ 消化器系の疾患		1					1			2	5.7	59.6	
Ⅻ 皮膚及び疎生結合組織の疾患		1								1	2.9	29.8	
ⅩⅤ 新生児の主要疾患						1				1	2.9	29.8	
ⅩⅥ 症状老衰及び診断不適當の狀態		2	3	1	1	2	1	3	1	14	40.0	416.9	

月 11.4%，11 月 8.6%，12 月 8.6% という状態であつた。即ち、多い月は 2 月，10 月で 5 月が少いということになるが，老衰では 10～3 月に多い傾向を示していた。年令別，性別死亡者は第 8 表の如く，若年者の死亡は殆んど見られず，60 才以上が 80% を占め，男子よりも女子の方が多かつた。国際分類による死因別実数は第 9 表の如くであつた。最も多いのはⅩⅦ 症状老衰及び診断不適当の状態に含まれる死亡で 40% にのぼり，次がⅧ 呼吸器系の疾患であつた。年令別死亡でも明らかであるが，乳児死亡が極めて少ないのが特徴的である。尚，各年度別の死因別でみてもわかる如く，特定の流行病による死亡者が多かつたというような年度は見当たらなかつた。更に特定死因別にこれを見ると，第 10 表の如く，やはり老衰が第 1 位を占め，次は結核であつたが，その比率は特に高くはなかつた。婚姻に関しては別に報告する予定であるので，今回の調査範囲では，毎年 1～4 件で昭和 23 年には異常に多く 9 件を数えたこと，及び離婚は僅かであつたことを記すに止める。

第 10 表 昭和 23～同 31 年間の総死亡者
35 名の特定死因別死亡数

死 因	昭和 23 年総死亡に ～ 31 年対する (対人口 死亡総数百分率 10 万)	死亡率
総 数	35	1042.3
老 衰	12	357.4
全 結 核	5	148.9
悪 性 新 生 物	4	119.1
心 臓 の 疾 患	3	89.3
肺 炎	3	89.3
中枢神経系の血管損傷	1	29.8
胃 炎 十 二 指 腸 炎 腸 炎 及 び 大 腸 炎	1	29.8
胃 及 び 十 二 指 腸 の 潰 瘍	1	29.8
その他の新生児の疾患 及び性質不明の未熟児	1	29.8
そ の 他	4	119.1

総括並びに考按

1) 人口静態

i 男女比：男女比は昭和 31 年 3 月 93.5 であつたが，人口が少いので昭和 26 年から 30 年迄 5 年間の平均によると 95.4 となつており，昭和 21 年，同 23 年の復員者及び引揚者の増加による以外はどれも女子が多いということであつた。最近の男女比を解明する為に伊豆七島（式根島は新島に含まれる）の男女比を比較したのが第 11 表であつて，即ちいづれも女子の方が多い。神津島以外の諸島は 94.9 から 99.2 の間にある。ひとり神津島が 92.6 の値を示したのは同村に於ける女子が，労働人口としての大きな役割を果たしているが為と考えられ興味深い。女子が多いのは当研究施設が調査した各農村に於いても同様である。

第 11 表 伊豆七島の性比較表

	大 島	新 島 (含式根島)	神 津 島	御 藏 島	三 宅 島	八 丈 島	利 島
昭和 26 年 1 月	97.9	96.9	92.3	106.2	98.5	98.3	97.9
27 年 1 月	96.7	95.0	91.8	100.6	99.6	98.1	93.9
28 年 1 月	95.3	94.4	93.7	91.8	99.5	97.2	95.3
29 年 1 月	95.2	95.1	92.2	92.3	98.4	97.5	91.2
30 年 1 月	94.7	92.9	93.0	92.2	93.0	97.4	96.2
以上 5 年間平均	96.0	94.9	92.6	96.7	99.2	97.7	95.4

ii 平均年令：他島との比較は出来なかつたが，当研究施設で調査した各地農村と対比すると，調査年度は異なるが本村の男 28.4，女 27.5 の平均年令はそれらの何れよりも高いのが注目される。しかしこれらの既に調査した農村の内でも特に平均年令の高い西浦村については岩井が 55 才以上の女子の構成率が男子より高率であつた為と解している如く，本村の場合も若年者が少ないことに原因している。近年人口の老年化が問題となつて来たが，本村に於ける 60 才以上の人口は全人口の 11.7% を占めている。（因みに昭和 25 年厚生省人口問題研究所の調査では全国平均は全人口の 7.7% である。）因みに当村の老令化指数は 7.8 を

示し（昭和23～31年の平均は7.9）、西浦村は6.9（昭29）であつた。なお御蔵島は同指数は実に11.1を示しており、若年層も少ないのでおそらく同村も平均年令は高いであろうと推測する。我が国では過去出生率の高かつた時代に生れた人口が生産年令層に送り込まれ、一方死亡率の低下と出生率の低下によつて幼年人口の割合が低下し、その反面老年人口の割合が上昇し始めている傾向にあるが、本村の状況もこの全国風潮に一致するものであつた。

iii 人口構成：0～4才の少いのは戦後一般の傾向で後述する如く出生率の低下によるが、15～19才及び20～24才の階層が相次いで急激に大きく減つてゐるのは本村民の移動の状況に徴しても極めて注目に価する。即ちこれ等の傾向はさきに比較の対象とした御蔵、式根の両島でも見出されたが、御蔵島は利島にも増して顕著な動きを見せ、これに反し式根島の変化は著明でないことが神津島に似てゐる。この点はこれらの島の性格を考えると甚だ興味深いものがある。即ち、前二者は嶮阻な様相を呈する耕地少なき農業村で、後二者は漁業を行うに恵まれた環境にあつて農業よりも漁業の活潑な村であり、社会的、経済的優位にある。従つて生産年令の流出も軽度にとゞまつてゐるものと考えられる。この他5～9才の多いのは、昭和23年以後5年間の出生率が高く、未だ人工妊娠中絶の行われることの少なかつたことを示し、男子の45～54才、女子の50～54才の少いのは、この島でも昭和初期の好況期に離村したものが多かつたのではないかと想像され、又60～69才の女子の少いのは主として死亡者のこの階層に多かつたことが原因と思われる。本村に於ける今次大戦関係の戦死者は合計11名で、これを調査時期に生存するものとしても、30～34才の層に1.6%、35～39才に2.7%、40～44才は0、45～49才が1.1%、50～54才は0.5%の変動を見るのみである。即ちこれらの影響は僅

かなものであつた。

iv 人口移動：本村でも既調査地、木祖村、西浦村の如く、椿作業の繁忙な晩夏から初秋の候には僅か乍ら近隣の島から主として女子の労務者の転入が認められる。（但し、他へ出稼に出るものはない。）然しその数は、椿実の出来如何によつて著しく動揺し毎年不定で、概ね数名から多くとも10数名でしかも遅くとも年内には引揚げざるを常とする一時的な季節労務者であるが、主に新島、式根島、大島より来村する。特に姻戚関係があるということは認められなかつた。今回の調査にもその影響は現われていない。たゞ彼等については感染性疾患（就中、恙虫病とフィラリア病）の移入の点に疫学的関心を払う要があると考えられる。但し幸い既往の外来者によつて流行性疾

病が伝播したという事例は認められておらぬ。村民の移動先は、こゝでも離村向都の傾向が見られ、大島、東京都内を主とし静岡県がこれにつぎ、大島以外の諸島やその他の地方へは僅かであつた。4月は就学、就職によるものが多く、又冬季の海上交通の不如意の状態から開放されて移動が多く、夏季の転入は農繁期であるので、学生が休暇を利用して手伝いに帰るものが多いため、11～12月の転出者が多いのは冬季の離島が容易でないため年内に用務を弁ずるものが多いためであろう。移動年令は15～24才の若年層に多く、さきの人口構成の減少部分と一致することは、これらが就学、就職のために去ることを示し、第Ⅰ報でも述べた如く低所得の村であるため畢竟、経済的事情からその子弟を離村せしめる場合が多いものと推察する。

2) 人口動態

i 人口推移：明治5年から大正9年間の増加は自然増加と目される。その後は殆んど変動なく推移したが、戦争の影響を受け終戦前後に若干の変動を示した。昭和22年の人口増加は戦災、引揚世帯の入つたこと及びこの年は戦前戦後を通じて稀にみる椿油の好況の年

であつた為に調査時期の 10 月には出稼者が一時的多数在島したのも関係していると思われる。

ii 人口動態：出生率は 9 年間の平均 25.9 であつたが、昭和 25 年から 30 年までは、昭和 26 年 34.0 で全国平均 25.3 を超したのを除き何れも全国平均より低く、此村でも漸次受胎調節及び人工妊娠中絶の行われて来たことを示すと考えられる。死亡率は戦後の平均 10.4 であつたが、昭和 30 年の 10.9 も全国平均 7.8 より高い結果を示している。乳児死亡率は戦後 9 年間の平均 23.0 で昭和 30 年の全国平均 39.8 より低く、死産率の同様の平均は 34.5 で昭和 30 年の全国 44.5 よりも遙かに低率であつた。死因に関しては特異な疾病はなかつた。また農作業に関係すると考えられる死因も認められなかつた。

結 論

以上東京都利島村の人口構成並びに人口動態に関して、主として戦後の資料に基づき検討を試みた。戦前の資料が殆んど逸散して分析することが出来なかつたので、既述の調査研究によつて結論に導くことは多少危険を伴う概ね以上の報告した人口構成及び人口動態の実態は同村の動向を示していると思われるので簡単に総括する。

1) 人口構成は 15～24 才の生産年令層に離村の傾向が強く認められて、この年令層は構成比率の減少が著明であり、為に高年令層の百分率が多くなつている。

2) 村民の移動先は大島と東京都内に集中し、大島を除く伊豆七島の諸島との間では意外に少なかつた。

3) 総人口及び世帯数は終戦前後に一時的変動があり、昭和 22 年を境に人口は戦後増加したが、その後は著しい変化を認めなかつた。

4) 出生率は近年低下の傾向を辿つているが、死亡率は全国に比し未だ高率であつた。しかし乳児死亡及び死産率は極めて低い。なお死因別の死亡率よりみて特異な所見は認められなかつた。

拙筆に当り、御指導を賜つた宮本璋教授並びに御指導、御校閲を戴いた柳沢文徳教授に厚く感謝の意を表します。

文 献

- 1) 岩井貫一：お茶の水医誌，Ⅳ，4，1956.
- 2) 宮本正之他：お茶の水医誌，Ⅰ，4，1953.
- 3) 徳山頼正他：お茶の水医誌，Ⅲ，2，1955.
- 4) 岩井貫一：お茶の水医誌，Ⅳ，3，1956.
- 5) 宮本正之他：お茶の水医誌，Ⅲ，3，1955.
- 6) 拓植一道他：お茶の水医誌，Ⅳ，2，1956.
- 7) 厚生省大臣官房統計調査部：人口動態統計(昭和 30 年).

Medical Analysis on Rural Welfare at Toshima Island

Part I. General Survey at the Research Area

By

Toru HIRAKAWA

Toshima Island, Tokyo, (one of Seven Islands of Izu) is a small island having 413 km² in area and located at about 140 Kilometers south east of Tokyo City on the Pacific Ocean, and there is Mt. Miyatsuka (507.5 m in high) in the central part of the Island, natural features are very hilly. The author investigated on Toshima village which is one of the villages of the Island and the result of the investigation on the outline of this village was as follows.

According to my investigation on March 1956, the number of house-holds were 83 and the size of population was 360. Increase and decrease of population were not noted by me. Average temperature of year round is 17.9°C. Due to not having river and water welling out, villager makes it a rule to stock rain water as their drinking water.

Further, due to not having port in this island, the facilities of communication on the sea were always irregular, and also fishing was not easy and degree of cultural life was lower than the other district. As industry, the fruit and oil of camellia were main products and the quantities of these products occupied one third of that of Tokyo-To and its farm land were occupied 22 per cent of all farm land in this island.

(From the Institute of Rural Welfare, Tokyo Medical & Dental University, Tokyo)

Medical Analysis on Rural Welfare at Toshima Island

Part II. On the Composition of Population and the Statistics
of the Movement of population

By

Toru HIRAKAWA

The author investigated on the structure and movement of population at Toshima village, Tokyo-To and obtained the following results.

In the construction of population on March 31st 1956, 0~4 age group was 10.8% and 15~19 age group was 5.6%. And rate of construction on age group showed remarkable decrease. Regarding cause of this statues, the former was due to the decrease of birth rate and almost the latter was due to detachment of villagers. Accordingly, percentage of high age group was in high rate.

Population and the number of household had change temporarily after and before the End of War II and on 1947, population increased but after that the author could not find out any remarkable change.

With regard to population trends birth-rate indicated 25.9 in 1950~1955 and this has recently been decreasing. Death-rate showed 10.4 in average for 9 years after the War II and this figure proves higher than 7.8 for throughout Japan. The rate on stillbirth showed 34.5 and death rate of suckling showed 23.0. Both showed rather too low rate. Marriage rate showed 8.9 and divorcement rate showed 0.5. About cause of death, the author did not find any special question. In case of migration, their destinations were concentrated to City of Tokyo and Oshima-Island.

(From the Institute of Rural Welfare, Tokyo Medical & Dental University, Tokyo)